

いちのせき

## 農委だより

第13号

2010

7

## 地域で農地を守る



みごとに復元され田植を終えた水田

東山郷農家組合による  
耕作放棄地再生利用緊急対策事業

大東町渋民地区の東山郷農家組合(組合長 石川誠司(農業委員))は、国の耕作放棄地再生利用緊急対策による交付金事業を活用し、同地区内の耕作放棄地67aを再生させました。

対象農地は所有者の疾病や高齢化により、長年、耕作されることなく放置されて荒廃し、周辺農地への影響も危惧されていたところ、親戚の及川三男さんが借受け、新規就農することとなり、同地区の東山郷農家組合が営農支援と再生事業を行いました。

同組合は、中山間地域等直接支払制度を活用して、バックホーやチェーンソーなどを備えており、組合員が除伐・抜根・耕起作業に取り組み、松や雑木が生い茂っていた農地を見事に再生させました。6月5日には、飼料用米の田植を行い、収穫後は大東町内の業者に引き取られるとのことです。

荒廃した農地は、地域の力により以前の水田の風景を取り戻しました。

**奥玉の地域と農地を守る「おくたま農産」**



8月の「スイートコーン祭」を待つ、とうもろこし

千厩町奥玉の農事組合法人「おくたま農産」（組合長 佐藤正男）は、平成19年3月に設立、現在の組合員339人で借受面積約175haと県内でも最大規模の集落営農組織です。

同組合は、一貫して奥玉地区の農地を守り、農業の振興と地域の活性化と環境保全を図る取組を続けています。



組合長の佐藤正男さん（中央）  
加工販売部の小山麗子さん（右）  
金野ミヨ子さん（左）

圃場の状態に合わせ、水稲、飼料用米、大豆、牧草等やハウス組合によるトマト、各地域班のとうもろこしやエゴマなど、借受した全ての農地を耕作しており、生産の一元化による効率化と共に、草刈等の管理は、地域班に責任を持たせるなど、自ら農地を守るという姿勢を貫いています。

昨年12月には、工房「あらたま」が完成し、組合員が連日、地元産の大豆で自家製みそを製造しており、地域に根ざした加工販売を進めています。

地域を守る「おくたま農産」の今後が期待されます。

菅原さんは、梨園110a、肥育牛36頭、水稲160aを、奥様の優子さんと息子さんの和久さんの三人と雇用者として経営しています。

梨は岩手県南が北限といわれ花泉地域で7戸の農家が栽培しています。菅原さんは、平成元年頃から栽培を始め徐々に経営面積を増やしてきました。現在の栽培品種は豊水や幸水が主力ですが、産直向けに8品種を栽培しています。出荷は主に農協を通じて名古屋方面に出荷しており、3割ほどは産直に出荷しています。梨栽培は樹勢とバランスを保つようにすることが大切で、有機肥料を使い十分に手を掛けることで美味しい梨ができるとのこと。

**元気です  
地域の担い手**

**地域の農業者を紹介します**

**花泉町永井の菅原秀雄さん**

肥育牛は月に1〜2頭を出荷しており、口蹄疫が発生した影響で相場が1割程度下落しており、今後の感染の動向が気懸かりです。

水稲は近隣農家と稲わらと堆肥



の交換等を行っており、シーズンには40〜50haの稲わらの巻き取り作業を行うなど、地域の担い手として頑張っています。

「梨も肥育牛も常に目配り、気配りが大切で、手をかけないといけないのはできない」と農業への思いを語っています。

### 室根町矢越の小山恵子さん

小山恵子さんは、常時雇用者の女性と二人で、露地35a、ハウス2.5aの小菊栽培のほか、アルストロメリア2.0a、スターチス1.5aを含め、計7棟のハウスでの花栽培と水稲30aを経営しています。



小菊等は農協を通じて出荷していますが、約3割は、室根の産直「旬菜館」や気仙沼ジャスコの産直コーナーに出荷しています。産直は一年を通じて需要が多く特に冬場に花の供給を求められ、ハウス

栽培に積極的に取り組んでいます。

小山さんは、餅やおふかし等を製造販売している室根農産物加工組合に参加し、もち米を供給しており、森林組合の女性部としては、毎月第3土曜日に「もりもり市」を開催しています。

また、グリーンツーリズムの外研修の経験を活かして、地元のグリーンツーリズム研究クラブ員としても活動するなど地域の中心として活躍しています。

「シーズン中は、昼に手入れと収穫、夜に花束づくりや梱包で大変だが、次はどの花を組合せた花束を作ろうかと考えると頭がいっぱい」と栽培の楽しみを語っていました。

## 全国農業新聞

### 全国農業新聞の購読を！

農業委員会組織が協力して作成している新聞で、毎週1回発行しています。

購読料 月額 600円

お申込みは、農業委員会または各支所産業経済課まで

## 「地産地消」

### 生産者と交流給食



キャベツを手に説明する千葉悦雄さん

西部学校給食センター（所長山辺孝）では、給食用野菜等の一部を地元の五つの産直団体から供給を受けており、全体の約3割を占めています。

そこで、同センターでは、6月の食育月間の一環として、食材を供給している産直団体の関係者と児童による交流給食を実施しました。

6月17日には、萩荘小学校（校長 沼倉祐子）に「農村婦人の家

青空市」の千葉悦雄さんと千葉正一さんが来校しました。

2年1組では、千葉悦雄さんが栽培している野菜の写真を見せて野菜の名前を質問したり、昨年の秋に植えたキャベツを生徒に触れさせたりしながら、食べ物はずぐにはできないので大切さを理解して、良く噛んで食べて欲しいと説明した後、児童と一緒に給食を食べながら楽しく交流しました。

千葉さんは「給食で食べてもらえるとと思うと栽培にも力が入る。常に、自分も一緒に食べる気持で農薬等は最小限にして栽培している」と意気込みを語っていました。



農地の貸借等  
利用調整の仲介を行います

昨年十二月の改正農業経営基盤強化促進法の施行により、市町村から農地利用集積円滑化団体として承認された団体が、農地の所有者を代理して農地の貸付等の仲介を行えるようになりました。

一 関市では、市内の一部を除き、一関市担い手育成総合支援協議会（一関市や農業委員会、農協等で構成）が農地利用集積円滑化団体となり、農地の所有者に代わって借受者を探す等の利用調整を行います。

この制度を使って、農地の貸付等を希望する方は、市役所農政課、各地域の支所産業経済課、一関市農業委員会事務局にお問い合わせください。

なお、申込を行えるのは、農地の所有者に限られます。申し込みの際は、印鑑および免許証など本人を確認できる書類をご持参願います。

農業者年金で  
ゆとりある老後を

農業者年金制度は、少子高齢化が進むなかでも安心して加入することができ、税制度の優遇などメリットも多い公的年金制度です。ゆとりある老後のために加入をお勧めします。

農業者年金の6つのポイント

- 1、農業者なら幅広く加入でき、家族一人ひとりが自分の年金を掛けられます。
- 2、自分が積み立てた保険料とその運用益によって自分が将来受け取る年金額が決まる「積立方式」なので、少子高齢化時代でも安心です。
- 3、保険料は2万円～6万7千円の範囲で自由に選択でき、途中で見直しもできます。

保険料支払額別の節税効果

税率	保 険 料 支 払 額		
	月額2万円 (年額24万円)	月額5万円 (年額60万円)	月額6.7万円 (年額80.4万円)
15%	3万6千円	9万円	12万1千円
20%	4万8千円	12万円	16万1千円
30%	7万2千円	18万円	24万1千円

- 4、年金は終身受け取ることができ、仮に80歳前に亡くなった場合でも80歳までの年金の現在価値相当額が死亡一時金として支払われます。
- 5、支払った保険料の全額が社会保険料控除の対象になります。税制面の優遇措置があります。

- 6、若い時期から長い期間、農業の担い手として頑張る方には、保険料2万円のうち最高1万円の国庫補助があります。

編集後記

いよいよ始まる米の戸別所得補償や中山間地域等直接支払制度などは、農家にとっては有難い制度ですが、最近の農政はころころ変わり大変な一面もあります。せめて5年くらいは続けて、その間に十分に検討し、次の施策に活かして欲しいものです。

また、口蹄疫の感染は畜産農家にとって大きなダメージとなっており、同じ農業者として大変心配であり、一刻も早く鎮静化に向かって欲しいと願っています。

最近、耕作放棄地対策が大きな問題となっており、特に中山間地帯の畑や条件の悪い沢田等の荒廃が多く見受けられます。農業委員会としても取り組んでおりますが、国や県、関係機関が一体となって情報交換しながら原因を探り、これからの農業に一つでも良い方向づけができればと思っています。

(畠山)

農委だより編集委員会  
編集委員長 小野寺弘行  
副編集委員長 伊藤守人  
編集委員 畠山養喜、齋藤ゆみ、千葉綾雄、村上真喜雄、伊藤 東